

後藤 万里子（言語学）

The Semantic Function of the English Present Tense Morpheme  
（英語における現在時制形態素の意味機能についての研究）

本論文は、英語の現在時制形態素の意味機能に関する理論的かつ実証的研究である。本研究では、先行研究で曖昧に扱われてきた時制の概念を認知文法に基づいて明確化し、現在時制の意味機能は、動詞の表す出来事が当該時点で起きていることを示すのではなく、Harder（1996）の原則に基づいて、時制節全体で表される意味内容が当該時点で成立していることを確認する機能であることを明らかにしている。また、Harder（1996）の原則は、単純現在形のごく一部の説明にしか適用されていないのに対し、本研究では、単純現在形の事例だけでなく、現在形にかかわる言語現象を包括的に分析し、この原則により統一的に説明している点に独創性が認められる。

第2章では、単純現在形は、基本的に物事の性質、一般性、事態のモード、等を叙述する機能を果たし、また要約、論説、等に単純現在が用いられるのは、その意味内容がimperfectiveモードで認知されるからだと説明している。また、この説明は、一見すると特殊で例外的に見える歴史的現在や遂行文の事例にも適用可能であること示している。第3章は、通時的視点を踏まえて、進行形構文が分詞で表される動作の過程の同質的狀態を叙述するという説明を試みている。未来を表す現在進行形の事例も、動詞の意味が拡張解釈を受けた表現であり、現在時制は一貫して動作過程の同質的狀態が現在成立している点を明らかにしている。以上の考察から、現在時制の形態素の意味機能に関して、従来の研究にはない統一的かつ独創的な説明を行っている。

第4章では、現在完了形の分析を行い、現在に関係のある過去の出来事を表すのではなく過去分詞の事態の生起の結果として特徴づけられる現在の状況を表すという事実を、通時的要因、言語類型的要因、副詞句との共起可能性、使用文脈の制限などの観点から考察している。特に、完了形におけるHAVEの意味は、本動詞のHAVEと同様、話者が当該の事態を主観的に保有する状況を表し、また完了形における過去分詞は、話者が当該の事態を主観的に保有する状況の特徴づける働きを担う点を明らかにしている。第5章では、現在形を持つ法助動詞の節形成における意味機能を考察している。特に、法助動詞を含まない現在形の構文が、話者の現実における既に実現した事態を表す側面に注目し、従来の研究では個別に研究されてきたwillとbe going to、canとbe able to、mustとhave to、等の意味の相違、If-節におけるwillの生起に関する制約、仮定法を中心とした過去形の法助動詞の意味機能、等を実証的に分析している。

本研究は、特に次の点で優れている。第1に、時制に関する言語現象の諸相を、形態レベル、語彙レベル、構文レベル、談話レベルなど、多角的かつ包括的に分析していること、第2に、限られた作例と共時的なデータだけでなく、通時的なデータと言語類型的なデータに基づき、信頼性の高い説明を行っていること、第3に、認知言語学の枠組みに基づいて、関連する時制現象を明示的・体系的に定式化していること、である。この研究成果は、英語の時制現象に関する基礎的研究として重要な意味を持つとともに、時間認知と事態把握に関する人間の知のメカニズムの解明のための基礎的研究としても重要な役割を持つものである。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。